

## 英語への翻訳 Translating into English

郡山 直  
KORIYAMA Naoshi

---

**Abstract:** During and after my long years of teaching English at university, I have had experiences in translating an 11<sup>th</sup> century book, *Hojo-ki* by Kamono Choumei, a mid-10<sup>th</sup> century collection of tales, *Ise Monogatari*, a part of a 12<sup>th</sup> century collection of tales, *Konjaku Monogatari Shu*, some contemporary poems of Japan and a book of two modern dramatic poems, *The Angel of Suffering and Zeami* by Moriguchi Saburo (2017). I was also a member of the translators' team of *Against Nuclear Weapons* (2007) and *Farewell to Nuclear, Welcome to Renewable Energy* (2012). I also immensely enjoyed reading and translating the poetry of Li Bai (701-762), the great poet in the Tang period of China and some other great Chinese poets. And, for materials for discussion in this paper, I have taken up "Akashia no Amega Yamutoki," a song sung by Nishida Sachiko, "Chants" of Zeami's ghost, two famous passages from *Hojoki*. As for the chants chanted by Zeami's ghost in the poetic drama by Moriguchi Saburo, I selected 9 verses for comparison between the Japanese original and my English translation. I have also included some of my favorite poems by Li Bai. By the way, it has been widely said that no translation is without mistranslation. So, please try to spot any mistakes in my translations. And it has been my New Year's Day custom to announce the New Year's Day Poem as sung by the Animal of the Year in the Oriental calendar ever since the Horse first sang its New Year's Day poem back in 1990, the Year of the Horse. In this paper, some of the Animals will sing their New Year's Day poems. The year 2021 happens to be the Year of the Cow. But she is not ready to send her New Year's Day poem for this paper.

---

**Key words:** 「切ない」、「ひぐらしの鳴く林」、「山寺の入相の鐘」、「中秋の明月」、「西方浄土」、「滅びしものの輝き」、「干支の新年の歌」、「李白」

The Japanese word, "setsunai," "the woods where evening cicadas were singing," "the evening bell of the mountain temple," "the Mid-autumn Full Moon," "the Pure Land in the West," "the glow of every perished thing," "the New Year Poem by the Animal of the Year," "Li Bai"

---

## アカシアの雨が止む時

西田佐知子の歌う「アカシアの雨が止む時」を最初聞いた時、あまり好きになれなかった。まず、歌詞の一番を見てみよう。

アカシアの雨にうたれて  
このまま死んでしまいたい  
夜が明ける 日がのぼる  
朝の光の その中で  
冷たくなった わたしを見つけて  
あの人は涙を流してくれるでしょうか

「このまま死んでしまい」とか「冷たくなった わたしを見つけて」という言葉が死を連想させてしまう。「死」は人間にとって恐怖の対象であるから、好きになれなかった。しかし、二番の

「思い出のペンダント  
白い真珠のこの胸で  
淋しく今日も あたためてるのに  
あの人は 冷たい瞳をして何処かへきえた」

という鮮やかなイメージに深い興味を感じた。さらに、三番全体を見てみよう。

アカシアの雨が止む時  
青空さして鳩がとぶ  
むらさきの羽の色  
それはベンチの 片隅で  
冷たくなった わたしのぬけがら  
あの人を さがして遥かに飛び立つ影よ

このなかの「青空」と「むらさき」の色のコントラスト、「鳩がとぶ」と「あの人をさがして遥かに飛び立つ影」の鮮やかな動的イメージは魅力的だ。三番は鮮やかなイメージを持つ、優れた、素晴らしい歌詞だ。それでわたしはこの素晴らしいイメージのあるこの歌を英訳してみたい、という気持ちになった。いよいよ、英訳に取り掛かると、わたし個人の日

本語の一語一語に対する意味、感じ方は他の日本人の一人一人とは微妙に違っているにではないか、ということが気になってきた。二番の一行目と二行目を見てみよう。

アカシアの雨に泣いている

切ない胸はわかるまい

二行目の「切ない胸」の「切ない」という言葉は、わたしにとって完全には理解できていない言葉だ。わたしは今までに「いま僕は切ない気持ちだ」と言ったことはない。なぜならわたしは「切ない」という感情を自分の意識の中で、正確に、はっきり感じることができていないからだ。そういうことを他の日本人に言ったら、「それは君が「切ない」という語のもつ感情をまったく知らないからだ」と言うだろう。確かにそのとおりだ。とにかく、わたしには、「切ない」という言葉の表す感情が、よく把握されていないのだ。一つの語が表す意味、感情は、しっかり把握すべきなのだが、それをしっかり把握してないことがある、と思われる。一人一人の人間は一つ一つの言葉について、それぞれ他人とは違った独自の意識、感情を持っているのではないか、と思うのだ。「切ない」は、「寂しい」でもないし、「悲しい」でもなく、もちろん「胸の張り裂ける」でもないのだ。ついでに言及すると、日本語の中にわたしが正確に理解できていない語がもっとある。例えば、「たたずむ」、「面はゆい」、「せわしない」などだ。「たたずむ」を辞書で調べると「しばらくその場に立っている」「立ちどまる」と出ていて、ただ「立っている」とは微妙に違うのだ。「切ない」、「たたずむ」、「面はゆい」「せわしない」などは日本語特有の微妙な性質を持った言葉である。翻訳においては、「切ない」、「たたずむ」、「面はゆい」、「せわしない」を英訳するときは、そのような感じを持った英語を使うのが望ましい。しかし、それは、極めて困難なことなので、わたしは大和英を参考にしながら、「切ない」を“painful,” 「たたずむ」を “stand for a while,” 「面はゆい」を “feel embarrassed,” 「せわしない」を “in a hurry,” というふうに、日本語と英語を適当に入れ替えているだけである。やはり翻訳は簡単ではない作業である。しかし、「翻訳は簡単ではない」、と言って敬遠して、何もしないでいると、何も生まれない。人間の子供も、一人でやっと立ち上がることを学び、次に一步、さらに一步、歩くことを学び、だんだん歩けるようになる。英文の習得も、つまづくことを恐れずに、少しでも多くの英文を書くことが必要だと思う。文法的なミスを恐れて、書かないでいると、結局いつまでたっても、何も書けないままで終わってしまうことになる。わたしは自分の経験から、翻訳という作業は簡単ではないが、実に面白いものでもある、とも思うようになった。

### 翻訳の経験

日本文学では『方丈記』や『伊勢物語』が好きだったので、50年ほど前それらの古典を

英作文の練習のつもりで全訳したことがある。好きな文章を英訳することは大変面白い作業だ。両方とも完訳したが、出版社を探して出版する自信も無かったので、出版の交渉もしなかった。その翻訳の原稿がいま本棚のどの付近にあるかも不明である。しかし、わたしは『今昔物語』も好きだったので、特に好きな物語を英訳してためてあった。その中から90篇の物語を選んで、清泉女子大のブルース・アレン教授に協力してもらって最終稿を仕上げて、2015年にタトル出版からアレン教授と共訳で出版した。有名な「藪の中」も「羅生門」も入っていて興味深い翻訳書で紀伊國屋あたりでも、*Japanese Tales from Times Past* という題名で店頭に出ている。「人生に無駄はない」という諺のとおり、英文修行のために『方丈記』や『伊勢物語』を英訳したことは『今昔物語』の抄訳、*Japanese from Times Past* の出版に繋がったのである。

#### アカシアの雨が止む時の英訳 水木かおる作詞 西田佐知子歌

アカシアの雨にうたれて  
このまま死んでしまいたい  
夜が明ける 日がのぼる  
朝の光の その中で  
冷たくなった わたしを見つけて  
あの人は 涙を流してくれるのでしょうか

アカシアの雨に泣いてる  
切ない胸はわかるまい  
思い出の ペンダント  
白い真珠の この胸で  
淋しく今日も あたためてるのに  
あの人は 冷たい瞳をして何処かへ消えた

アカシアの雨が止む時<sup>や</sup>  
青空さして鳩がとぶ  
むらさきの羽の色  
それはベンチの 片隅で  
冷たくなった わたしのぬけがら  
あの人を さがして遥かに飛び立つ影よ

最初この歌の歌詞を読んだとき死を連想させる箇所があるのであまり好きになれなかったと書いたが、繰り返し読んでいくうちに、だんだん好きになってきた。西田佐知子の歌を You Tube で聞けば聞くほど好きになってきた。それで私はこの歌を英訳することになり、このように英訳した。

**When the Rain Stops in the Acacia Woods** Words by MIZUKI Kaoru

I only wish to die, drenched in the rain  
In the acacia woods, just as I am now.  
Day breaks, the sun rises  
And when he finds me cold  
In the light of the morning sun,  
Would he ever shed any tears for me?

He would not understand my pain-filled heart  
That is crying in the rain of the acacia woods.  
While I am sadly warming the memorable pendant  
With these white pearl-like breasts even today,  
He has gone away somewhere  
With his eyes so cold.

When the rain of the acacia woods stops,  
A dove flies up toward the blue sky.  
The purple of its feathers is  
Nothing but the cast-off skin of mine  
That is cold in the corner of the bench,  
An image of mine looking for the man who has gone far away.

一番の最後の行は「あの人は 涙を流してくれるでしょうか」となっている。つまり「あの人は 涙を流すでしょうか」なら英訳は簡単だが、「あの人は 涙を流してくれるでしょうか」をどう訳すか。簡単な日本語を英訳することには問題ないが、このように、微妙な表現の日本語をうまく英訳するのは容易ではない。わたしは無意識的に、上記のように訳したが、あとで原詩をよくみたら「あの人は 涙を流してくれるでしょうか」である。わ

たしは最初、無意識的に、「あの人は涙をながすでしょうか」と読んで、“Would he ever shed any tears for me?”と訳したが、「涙を流してくれるでしょうか」の訳に近づける目的で、いろいろ考えてみた。

“Would he be kind enough to shed any tears for me?”

“Would he be kind-hearted enough to shed any tears for me?”

“Would he be gentle enough to shed any tears for me?”

わたしの判断では、最初に無意識的に書いた英文

“Would he ever shed any tears for me?” でいいのではないか、と思う。詩の翻訳はなるべく簡単な、語数の少ない方がいい、とわたしは思う。

では二番の最初の二行をどう訳したか見て欲しい。

アカシアの雨にないてる

切ない胸はわかるまい

He would not understand my pain-filled heart

That is crying in the rain of the acacia woods

わたしは「切ない」を訳すのに苦労した。「切ない」を大和英で引くと“oppressive,” “suffocating,” “painful”と出ている。わたしは“painful”を使う積りだったのに、どういうわけか無意識的に“pain-filled”と書いてしまっていた。これは全く無意識的に起こったことである。ランダムハウス英和辞典を調べてみると“pain-filled”という語は出てこない。しかし、わたしの意識の底では、“painful”より“pain-filled”の方が“heart”の修飾語としてはいいような感じがしたので、そのままにした。ランダムハウス英和辞典に出ていない“pain-filled”という語を使うことが許されるのか、という問題が出てきたわけだ。わたしは“painful heart”と“pain-filled heart”を何度も、何度も、読み比べて考えた。翻訳者はこのような問題にぶつかることがある。この二つの訳語“painful heart”と“pain-filled heart”どちらがいいかを、いつか英語圏の人に会うときに意見を聞きたいと思っている。しかし English-speakers の間でも、いろいろと意見が違うと思う。いずれにしろ、「アカシアの雨に泣いてる/切ない胸はわかるまい」は何か魅力的な感じのある文章だ。魅力的な日本語を、可能な限り魅力的な英文に翻訳する努力は翻訳者には要求される重要な条件だ。また自分の英訳文に大きな魅力を感じるときの喜びは翻訳者に与えられた最高の喜びだ。自分の部屋で自分が訳した英文を朗読して、自分の英文に陶醉してしまうことも時々あることだ。

## 世阿弥の霊の謡う自然、人生観

わたしは故守口三郎氏(1935-2019)の『劇詩：受難の天使・世阿弥』を1917年から2年ほどかけて英訳して2020年コールサック社から出版した。世阿弥の霊が謡う謡の内容は実に素晴らしい。仏教の世界に生きていた世阿弥の謡う自然と人生観は英国でキリスト教の世界に生きていたワーズワースやキーツが描く自然と人生観は違う感じがする。この違いを感じることは、わたしにとって文学研究の醍醐味だ。私は守口氏の劇詩に出てくる世阿弥の霊が謡う自然と人生観に深く感動している。守口三郎著「劇詩受難の天使・世阿弥」(コールサック社、2020) p. 43 以下参照。守口氏の原文とわたしの英訳を下に併記したので、比較して頂きたい。

春麗らかな一日は 海辺に行きて 白波寄せる荒磯に立ち  
 魚群れる早潮望み 轟き響む海鳴りを 龍神うなる謡とし  
 岩壁を打つ怒濤を鼓に 海の涯より照り渡る光に向かい  
 鰭魚<sup>はたうお</sup>恵む神仏に 沖の漁りの無事祈り 風を鎮める舞を捧げた

On a beautiful spring day I went to the seaside, stood by the rocky seashore,  
 Upon which white waves were sweeping, and looking over the rapid current  
 full of fishes,  
 I danced to the roaring sounds of the Sea, considering them the chanting  
 of the Dragon God,  
 Dancing to the drum of the furious waves beating on the rocks,  
 Looking toward the Light shining brightly from the end of the Sea,  
 Dedication my dance to the gods and Buddha who mercifully give us groupers,  
 Praying for safe fishing in the Sea, praying for calming down the winds.

遠山に 花の雲の霞かかれば 花に誘われ 心浮き  
 急ぎ出で立ち 山路分け入り 風に散り舞う花の光に  
 万象の心を観じ 野辺に咲き散りゆく花を惜しめども  
 心より心に映える面影の光の花こそ 常住不滅の花と知り  
 われは空の桜の精となり 山渡り花咲き散らす嵐を笛に  
 行方を知らず 無常安穩 轉身歓喜 仏法散華の舞を舞った。

When clouds of cherry blossoms covered distant mountains,

I was tempted by cherry blossoms, and quickly set out with a merry heart,  
 And going along the mountain trails, I saw the spirits of all things  
 In the bright cherry blossoms falling and fluttering in the wind  
 And enjoyed looking at the wild flowers blooming and falling in the fields.  
 But I realized that the image of the Flower of Light appearing  
     in each and every heart  
 Is none other than the Eternal, Immortal Flower.  
 And I turned into the spirit of cherry blossoms in the Sky, and I danced  
 To the flute music of the stormy winds gong over the mountains,  
 Blowing down the cherry blossoms, the dances of "Peace in Transience,"  
 "Joy in Transformation," and "Flowers scattering in Buddha's World,"  
     not knowing whither I was going,

行く春を惜しみ送るも 今は限りと心がけ 風薫り  
 花咲きすさぶ野にも出で 色とりどりの花と語らい  
 光さす青葉若葉の林に入れば ほしいまま鳴く山鳥を  
 笛と鼓に 谷川の高鳴る音を謡とし 精爽やかな社で舞い  
 風そよぐ植田に立ちて 黄金の瑞穂の実りを祈り 遠田の  
 蛙の天にも届く声を謡に 望み見る満目青山を讃えて舞った。

Assuming that it might be my last chance to savor the departing spring,  
 I went out to the fields where flowers were abundantly blooming  
 In the gentle winds to talk with the flowers of various colors,  
 And when I got into the woods of green young leaves lit in the Sun,  
 I danced at the fresh-aired shrine to the flutes and drums of the mountain birds  
 Which were freely singing, and to the chanting of the loud sound of the stream.  
 I stood by planted rice paddies in gentle breezes, praying for a rich crop  
     of golden rice.  
 I danced to the loud chanting of the frogs in the distant paddies  
     as far as Heaven  
 In praise of all the green mountains as far as I could see.

.....



秋の初風肌寒く 物思う頃 ひぐらしの鳴く林を辿り  
 昔の帝の人気なきみささぎに参り タベの篝のはかなく  
 ゆらめく炎を明かりに 暗き社の奥処に隠れ 哭く啄木鳥の  
 声を笛とし 山寺の入相の鐘の音を鼓に 回向の舞を供養した。

When the wind was chilly in early autumn and I felt pensive,  
 I went through the woods where evening cicadas were singing  
 And visited the deserted tomb of the ancient emperor.  
 By the light of the weak, flickering flame of a watch fire in the evening,  
 I dedicated a dance as a memorial service to the flute of the voice  
 Of a woodpecker hidden in the backwoods of the dark shrine  
 And to the drum of the evening bell of the mountain temple.

天高く澄み渡る日の夕べには 中秋の明月を見んと  
 御崎の浜に遠く行き 入り日の沈む海の彼方の寂光に  
 西方浄土を祈願して舞い 夜に入れば 天空かかる満月の  
 波も静まる海に照り映え 渺<sup>びようぼう</sup>茫静寂の光の海に 万象還り  
 寄せては返る波を拍子に 光明遍照 法楽恍惚の舞を奉じた。

In an evening when the Sky was clear in high Heaven,  
 I went out as far as the shore of Misaki Point  
 To view the Mid-autumn Full Moon, and danced to the faint Light  
 Of the Sun setting on the other side of the Sea,  
 Worshipping the Pure Land in the West.  
 When night came, the Full Moon hanging high in Heaven shone  
 Brightly over the peaceful Sea,  
 And to the rhythmic beat of all the waves coming in and drawing back,  
 I dedicated dances of “All-Pervading Light” and “Religious Ecstasy.”

秋深まれば 空渡る鳥を見送り 野の露草の光を惜しみ  
 深く色づく山に入り 照り映える炎の紅葉 静かに散り落ち  
 埋む落葉の地に輝けば 万象の変化流転に 神仏の光影を観じ

鳥の声 谷水の音に 山水の説法を聴き 妙法讃歎<sup>さんたん</sup>の舞を舞った。

When autumn deepened, I saw off the birds sailing in the Sky,  
And fondly praised the light of the dayflowers in the fields.  
I went into the mountains, where tree leaves were changing their colors.  
When the bright, flaming red leaves fell silently and shone on the ground  
covered with fallen leaves,  
I saw the moving shadows of the gods and Buddha in the constant transfiguration  
of all things.  
In the singing of the birds and in the sound of the mountain streams,  
I heard sermons of the mountain and water and I danced the dance:  
“The Praise for the Marvelous Law of Buddha.”

冬の来て 嵐のあとの一日は 枯れ立ちの林にも入り  
茨<sup>しゅじつ</sup>の朱実<sup>しゅじつ</sup>に冬深き光を捉え 山鳥の光幽けき影も移ろい  
朽ち葉埋まる枯れ谷の静寂の内 滅びしものの輝き増せば  
目眩むほどの光に包まれ 寂滅光耀 新生凝望の舞を捧げた

When winter came, and on a day after a stormy wind, I went into woods  
of withered trees  
And caught winter's deep light in the red nuts of a thorn.  
In the stillness of the dead valley, where the dimly-lit image  
Of a mountain bird moved and rotten tree leaves piled up,  
The glow of every perished thing increased, and I was enveloped  
in a blinding Light,  
And I dedicated dances of “Nirvana's Light” and “Aspiration for Rebirth.”

新しき年の始めは 暁に起き 若水を汲み 清々しき朝  
白雪映える社に詣で 四海静穏 衆生浄福を祈って舞った。  
風霜に耐える巖に花咲くごとく 老骨に心の花のなお在れば  
命の限り万象を祝い 神仏を讃えることこそ 老いの本意なれ。

At the beginning of the New Year, I got up at dawn, drew fresh water,

And in the fresh morning, I visited the shrine brightly covered  
 with white snow and I danced,  
 Praying for “Peace of the World” and “Happiness for All Human Beings.”  
 Like a flower blooming on the rock enduring winds and frost,  
 I still had a flower of my heart in my old body, and so it was my real wish  
 To celebrate everything with all my life and praise the gods and Buddha.

厳冬の下界静まる極寒の夜 物を離れ 人を離れ 我を  
 離れて 雪の明かりの凍原に立ち 冴えまさる銀河を仰ぎ  
 ほのかに瞬く群星の<sup>しょうみょう</sup>声明を謡に 天界の妙なる調べを音曲に  
 黙照の天の広座に進み出で 妙境現成<sup>げんじょう</sup> 光明歓喜の舞を奉じた。

On an extremely cold night in the quiet World in severe winter  
 I got away from things, from human beings, even from myself,  
 And stood in the frozen field in the light of snow, looking up  
 at the clear Milky Way.  
 I walked forth onto the grand Stage of Silent Heaven to the accompaniment  
 Of the chanting voices of the countless stars dimly blinking and the Music  
 Of Heaven's exquisite melody, and danced the dance of “The Realization  
 of the Exquisite State” and “Bliss of Light.”

### 『方丈記』 ( *Hojoki, An Account of My Hut* )

『方丈記』は鴨長明（1155-1216）の随筆集であるが、特にその書き出しは有名。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。  
 よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、  
 久しくとどまりたるためしなし。  
 世中<sup>よのなか</sup>にある人と栖<sup>すみか</sup>と、又かくのごとし。たましきの都のうちに、  
 棟を並べ、薨を争へる、高き卑しき人のすみひは、  
 世々を経て尽きせぬ物なれど、是をまことかと尋ねれば、  
 昔しありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は  
 大家滅びて小家となる。住む人も是に同じ。所もかはらず、人も多かれど、  
 古見し人は二三十人が中に、わずかに一人二人なり。

朝に死に、夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。  
不知、生まれ死ぬる人、いづかたより来りて、いづかたへか去る。

The water of the river flows ceaselessly, but the water isn't the same.  
Bubbles floating on the edge of the river, now disappearing, now appearing,  
have never remained long.

Human beings and their houses in the world too are like them.  
In the beautiful capital city, the houses built by people high and low  
stand side by side, competing with each other in height,  
and they look long-lasting, standing from generation to generation,  
but if we look at them carefully, those which existed in the past are few.  
Some were burned down last year and built up this year. Some large houses  
perished, replaced by small ones. People living in the houses too are like them.  
I see many people in the same place, but there are only one or two that I have seen  
in the past among the twenty or thirty people there. Some die in the morning, while  
others are born in the evening, just like the bubbles in the water. We neither  
know where the people who are born and die come from nor whither they go. Nor  
do we know for whom we worry so much about building a temporal residence in this  
world, nor how we delight our own eyes with what we build. Which is more temporal,  
the master or his dwelling? They are just like a morning glory and a dewdrop on it.  
The dewdrop may fall, while the flower remains. Even if the flower remains, it fades  
in the morning sun. Or, the flower may wither, while the dewdrop remains. Even if  
it remains, it can't last till evening.

つぎに鴨長明が自然の移り変わりを詠った有名な文章を見てみよう。

春は藤波<sup>ふじなみ</sup>を見る。紫雲のごとくして、西方にほふ。夏は  
郭公<sup>ほととぎす</sup>を聞く。語らふごとに、死出<sup>しで</sup>の山路<sup>やまじ</sup>を契<sup>ちぎ</sup>る。秋はひぐ  
らしの声耳<sup>こえ</sup>に満てり。うつせみの世を悲しむほど聞ゆ。冬  
は雪をあはれぶ。積り消ゆるさま、罪障<sup>きこ</sup>にたとへつべし。

In spring, I see clusters of wisterias, which look like purple clouds,  
blooming beautifully to the west.

In summer, I hear the cuckoo. As if in talking, I ask the bird to be my guide  
on the road of Death.

In autumn, my ears are filled with evening cicadas' voices.

They sound as if they are wailing over this ephemeral world.

In winter, I am touched by snow.

The way it piles up and melts away can be compared to the sins of human beings.

### 干支の新年の歌

わたしは 1990 年の<sup>うま</sup>午年の元日に「馬の新年の歌」を書いて以来、毎年干支の新年の歌を書いてきた。その最初の「干支の新年の歌」と数篇の新年の歌を見ていただきたい。

#### A NEW YEAR SONG OF THE HORSE

——Written on the first day of the Year of the Horse, 1990——

Long before the car was invented,  
I carried man from Mongolia to Spain,  
from Alaska as far down to Cape Horn.

The dog has been only his pet,  
wagging his tale, asking for a pat on the head,  
or a bone of a lamb.

Of course, he is of some help,  
retrieving a pheasant in a hunt,  
or barking at a sneaking thief.

I am man' s greatest helper,  
plowing his fields,  
carrying his sacks of grain, or anything heavy.

I was his comrade-in-arms,  
pulling the cannon, or charging at his enemy.  
I even died by his side.

Long before the plane was invented,  
I could even fly over the prairie,  
madly dashing with all my might,

kicking the ground with my powerful hoofs,  
making him feel the thrill of speed,  
he clinging to my back.

Nothing makes him so wild  
as the excitement at my race,  
huge crowds roaring louder than in the ballpark.

### A NEW YEAR SONG OF THE ROOSTER

—Written on the first day of the Year of the Rooster, 1993—

Since long before the clock was invented  
In the history of human civilization,  
I've been a living clock for human beings,  
faithfully heralding  
the arrival of a new day  
every morning,  
telling them to wake up  
and get up  
and get busy gathering food.  
And now this morning  
I crow my loudest  
in superb tenor,  
telling human beings  
in every corner of the world  
of the arrival of my year.

次の詩は無理に脚韻を使って書いた詩で、最後の二行は下品な表現ですが安外面白いかな

も知れません。詩は高尚な思想、喜びを表現するだけでなく、露骨なイメージで人生の可笑しさも表現して笑いを誘うものでもあるのだ。

**A 14-Line Poem of the Wild Boar**

—Written on the 3<sup>rd</sup> day of the Year of the Wild Boar, 1995—

My teeth I gnash  
And I clash  
Against my foe. I swear  
Even a bear I don't fear.  
With an object in my mind,  
I dash, not looking behind.  
With my stout snout I dig up a yam  
By the side of a dam.  
I leap before I look,  
Jumping over a brook.  
I don't care even if my enemy's build is large.  
Baring my tusks sharp, I charge.  
With the jet of my fart  
I dart.

**猪の十四行詩**

— 1995 年、<sup>い</sup>亥年の正月三日に書く —

歯を食いしばって  
敵に  
ぶつつかるのだ 俺は  
熊も恐れはしない  
目標を心に決めたら  
突進 後ろなど見はしない  
強い鼻先でダムの横で  
山芋を掘る  
前も見ないで  
小川を跳び越えるのだ

俺の敵の体格が大きかろうが、構いはしない  
鋭い牙をむき出しにして、突進  
俺の屁の噴射の力で  
突進

次の詩は「猿の歌」であるが、couplet を使って書いてみた。韻を使って書くことは殆どないので、自分でも、うまくいったのか、うまくいかなかったのかは、判断できない。ただこの詩のテーマとして、人間の知能が、いかにして、より効率的に人間を殺すかに使われていて、核兵器を発明、開発、してしまって、核兵器の廃絶もできずに困っている状況を猿に批判させてみた。人間は自分の知能を自分の平和、幸福のために使わずに、人間を効果的に殺すために使っているのだ。人類は自己撞着に陥っている。我が国の政治家たちは、未来の戦争に参加して、我が国を軍事大国にしたい、という愚かな考えで、憲法改正を計画している。これほど危険で、これほど愚かなことはないのに、核兵器禁止条約にも背を向けている。これは一体どういうことなのだ。核弾頭が何万発もある現在、人類を滅亡から救う方法はブライス先生の「たたかわざる」精神以外にないのだ。人間の愚かさを批判している「猿の新年の歌」を聞いてみよう。

### A NEW YEAR SONG OF THE MONKEY

—Written on the first day of the Year of the Monkey, 2004—

You might have seen how we wild monkeys fight.  
You say we look fierce and agile and bright.  
When we fight, we bite the foe with our jaws,  
And scratch the other fellow's fur with claws.  
We know not how to use a stone or a stick.  
We don't hit with a piece of a broken brick.  
But look how shrewdly human beings fight.  
They are smart, clever, crafty, wise and bright.  
At the beginning of their history,  
They would just fight with their fists only.  
Then they learned how to use a stone and a stick.  
Then they made vicious weapons that make us sick,  
Weapons that fly and pierce and explode and kill.



Just look how they beat their foes to their fill.  
They even devised something horrendous.  
Its destructive power is tremendous.  
Hundreds of thousands of their own species,  
In a flash, could be turned into charred pieces  
With their most, violent, destructive device.  
“Don’t be arrogant!” is my keen advice  
To the smartest creature on the Planet.  
“Your arrogance will catch you in the net.”

### 猿の新年の歌

— 2004年、申年の元日に作る—

俺たち野生の猿が喧嘩するのをお前たちは見ただろう  
俺たちは獰猛で、素早くで、利巧だ、とお前たちは言っている  
喧嘩の時は、俺たちは相手に噛みついて  
相手の体を、爪で引っ搔くだけさ  
俺たちは石や棒の使い方は知らない  
俺たちは相手をレンガの破片で叩かない  
でも、人間どもの、ずる賢い喧嘩を見てみる  
奴らは賢くて、利巧で、狡猾で、賢明で、頭がいい  
奴らの歴史の最初のころは  
拳骨だけで喧嘩していたが  
やがて石や棒の使い方が分かってきて  
今度は、考えただけでも気分が悪くなるほどの凶悪な武器を考案したのだ  
飛んでいって、突き抜け、爆発して、殺す武器を作ったのだ  
人間どもが思い切り敵を叩きつける様子を見てみる  
人間は恐ろしいものを考案したのだ  
その破壊力は驚異的  
人間という種の何十万という数が一瞬のうちに  
黒こげになってしまうほどの破壊力を持った武器だ  
「傲慢になるな！」という言葉が、この惑星上の  
最も賢い生物への俺の忠告だ

「お前たちの傲慢さがお前たちを一網打尽に捕まえるぞ」

## 中国の古典詩

### 月下独酌

李白 (701-762)

花間一壺酒	花間 一壺の酒
獨酌無相親	独り酌みて 相親しむもの無し
舉盃邀明月	杯を挙げて明月をむかえ
對影成三人	影に対して三人と成る
月既不解飲	月 既に 飲むを解せず
影徒隨我身	影 徒らに 我が身にしたがう
暫伴月將影	暫く月と影とを伴って
行樂須及春	行樂 須く春に及ぶべし
我歌月徘徊	我歌えば 月 徘徊し
我舞影凌亂	我舞えば 影凌亂す
醒時同交歡	醒むる時 同に交歡し
醉後各分散	酔いて後 各々分散す
永結無情遊	永く無情の遊を結び
相期邈雲漢	相い期す 邈 (ハル) かなる雲漢に

## DRINKING BY MYSELF UNDER THE MOON

Li Bai ( 701-762)

Surrounded by flowers, I sit with a jar of rice wine by my side.  
 I drink alone with no company around.  
 Raising my cup, I welcome the bright moon.  
 With my shadow joining us, we are three.  
 The moon doesn't understand drinking.  
 My shadow only follows me.  
 Keeping company with the moon and my shadow for a while,  
 I should enjoy the spring outing.  
 When I sing, the moon wanders around.  
 When I dance, my shadow moves wildly.  
 When we are sober, we entertain each other.

When we get drunk, we break up.  
We promise to keep our friendship,  
Hoping to meet again in the distant Milky Way.

**望天門山**                      天門山を望む **李白 (701-762)**

天門中斷楚江開	天門中斷して楚江開く
碧水東流至北廻	碧水東流して北に至って廻る
兩岸青山相對出	兩岸の青山相對して出で
孤帆一片日邊來	孤帆一片日邊より来る

**Looking at Mt. Tianmen**                      Li Bai (701-762)

Mt. Tianmen breaks in the middle and the Chu River flows.  
Blue water flows east and then turns north.  
Green mountains on either side tower, facing each other.  
Out of the setting sun a single sail comes forth.

**蘇台覽古**                      李白(701-762)

旧苑荒台楊柳新	旧苑荒台楊柳新たなり
菱歌清唱不勝春	菱歌清唱春に勝えず
只今唯有西江月	只今 唯有り 江西の月
曾照吳王宮裏人	曾って照らす 吳王宮裏の人

**Reminiscing about the Ancient Times at the Su Palace**      Li Bai (701-762)

At the ancient garden and ruined Palace, willows have buds new.  
Maidens gathering water chestnuts sing of spring most touchingly.  
Now I only see the moon above the Xi River.  
It once shone on the lady in the King's Palace of Wu.

結び

『方丈記』、20世紀中葉の日本現代詩、『今昔物語集』、守口三郎著『劇詩：受難の天使・世阿弥』その他の英訳の経験に言及しながら翻訳についての意見を述べてきた。わたしは2020年11月に94回の誕生日を迎えたので、余生が長いわけではない。長くない余生の中で何をやっていくかは、わたしにとって重要な問題である。今までに大分進めてきている中国の唐の時代の李白の詩の英訳、『今昔物語』の英訳、自作の英語詩の創作、この三つの分野のどれに重点を置いて活動してゆくかは自分でも分かっていない。その日、その日、の気分に応じて、どちらかに重点を置いて、活動してゆくのもかもしれない。いずれにしろ、美しい英文、満足のゆく英文、新鮮な英文、を創造してゆきたいと思う。そして、もちろん宗片邦義会長のブライズ先生論、平和論、新作能、も読んでいきたい。守口三郎著『劇詩：受難の天使・世阿弥』のなかの世阿弥の言葉は自然、人生を詠う優れた文学なので、繰り返し読んでいきたい。

さて残りの紙面にわたしの主要な著作を紹介させて頂きたい。

### 自作英詩集

*A Fresh Loaf of Poetry from Japan*, (BookWay, 2018)

この詩集の中には米国、カナダ、オーストラリア、南アフリカの小、中、高校の教科書に収録されている詩7篇、中国語、韓国語、フランス語、イタリア語、ベトナム語、ギリシャ語などに翻訳された詩8篇も掲載されています。

*Poesie*, (Forfurn/Quinta Generazione, Italy, 1990)

これはイタリアでイタリア語訳されて出版された詩集

### 随筆集

*Another Bridge over The Pacific*, (Vantage, 1993)

これは米国留学の思い出を書いた随筆集

### 翻訳書

*Like Underground Water*—The Poetry of Mid-Twentieth Century Japan—  
co-translated with Edward Lueders, (Copper Canyon Press, 1995)

*Japanese Tales from Times Past* co-translated with Bruce Allen, (Tuttle, 2015)

これは『今昔物語集』から90篇の物語を抄訳

*SOUL SEEDS*—Revelations & Drawings by Carolyn Mary Kleefeld, (Coalsack, 2014)

*The Divine Kiss*—Poems and Drawings—by Carolyn Mary Kleefeld, (Coal Sack, 2017)

*Two Dramatic Poems: THE ANGEL OF SUFFERING • ZEAMI*, (Coal Sack, 2020)

*Doronkono Uta*—Poems by Children Working with Clay—(Godo Shuppan, 2016)

*Pains of East Asia* Poems by Suzuki Hisao (Coalsack, 2019)